



山内昌之

【武蔵野大学特任教授】



徳川の幕末
人材と政局

松浦 玲 著

筑摩書房
1700円＋税

この人に訊け!

徳川十四代将軍・家茂が大坂城で急逝した時、21歳の若い死を嘆く者は三名だけだったと悼むのは越前の松平春嶽である。あとの二人は、老中の板倉伊賀守勝静と勝安房守義邦(海舟)だった。保身をはかる他の幕臣はすぐに一橋慶喜をかつぐ有様である。幕府に人がいなかったわけではない。ただ統制麻のごとく乱れる末期症状を呈していたのである。

一橋派や開明派といっても、開国や改革の意味を正しく理解していない点に幕府の悲喜劇があった。一例として著者は、日米修好通商条約交渉でハリス領事による同種貨幣の同じ重量による交換を認め、た岩瀬忠震の不手際を紹介する。重量だけで銀を比較すると日本の一分銀はメキシコドルの3分の1の価値にすぎない。銀の価値が高い日本でハリスの保有貨幣を三

幕末通史を厳しく検証する将軍や老中まで人事を乱れる統制

倍に化けさせる仕掛けを認め、金の大量流出を引き起こした。「解っている筈の岩瀬」がハリスの詐欺まがいの外交トリックにはまったのだ。「岩瀬の罪は重い」というのは正しい。せめて対米交渉に水野忠徳をもつてくれたらこの詐欺に引っかけられなかったかもしれない。水野は、日英関係を巧みに処理し、日米通商条約にも慎重な姿勢を示した人物である。本来なら条約批准書の交換で渡米すべき人材であった。岩瀬と水野では開明派官僚といっても能力や識見に格段の差がある。人事のミスマッチこそ幕府瓦解の深刻な要因だと本書に教わる。著者は日米修好通商条約調印が不可避だと朝廷に説明するために、成算なく上京して勅許を拒否された老中・堀田正睦にも厳しい。堀田は幕威を落すために京都に出かけたと言われても仕方がない。これと比べると、政争や情勢分析の失敗を重ねながらも、次第に経験と粘りを増す松平春嶽への冷静な評価が際立つ。建設的対案をもたずに御三家の権威をふりかざす水戸齊昭らに対して、門閥譜代を率いて幕政を主導する井伊直弼の決断力とリーダーシップの苦労にも目配りを怠らない。著者のしつかりした史眼と文章力には誰が読んでも感心するだろう。

「この人に訊け!」本の選者たち (50音順) 嵐山光三郎 (作家)、井上章一 (国際日本文化研究センター所長)、岩瀬達哉 (ノンフィクション作家)、大塚英志 (まんが原作者)、番山リカ (精神科医)、川本三郎 (評論家)、鴻巣友季子 (翻訳家)、関川夏央 (作家)、平山周吉 (雑文家)、森永卓郎 (経済アナリスト)、山内昌之 (武蔵野大学特任教授)、与那原恵 (ノンフィクションライター)